

中等教育研究開発室年報 第35号（2022年3月31日発行）別冊電子版
2021年度 授業実践事例

国語科 高等学校第Ⅰ学年

「寄す」思いを読み解く—漢詩をよむことから見えてくるもの—
古典作品を解釈し，表現の多様性をとらえる
韋応物「秋夜寄丘員外」『国語総合 古典編』（東京書籍），
李商隠「夜雨寄北」『全唐詩』

授業者 朝倉 孝之

（校内研究授業）

広島大学附属中・高等学校

高等学校 国語科 学習指導案

指導者 朝倉 孝之

- 日時 2022年1月28日(金) 第1限
- 場所 多目的教室
- 学年・組 高等学校 1年3組 40名(男子19名, 女子21名)
- 単元 古典作品を解釈し, 表現の多様性をとらえる
韋応物「秋夜寄丘員外」『国語総合 古典編』(東京書籍), 李商隱「夜雨寄北」『全唐詩』
- 目標
1. 古典の文の成分の順序や照応, 文章の構成や展開の仕方について理解を深めることができる。([知識及び技能] (1) ウ)
 2. 古典の作品や文章などに表れているものの見方, 感じ方, 考え方を踏まえ, 人間, 社会, 自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりすることができる。([思考力, 判断力, 表現力等] C カ)
 3. 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに, 生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ, 我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め, 言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養おうとする。([学びに向かう力, 人間性等])

指導計画(全2時間)

- 第1時 韋応物「秋夜寄丘員外」をよむ。
第2時 李商隱「夜雨寄北」をよむ。(本時)

授業について

離れている人に言葉をおくことを「寄」という。古来直接言葉を交わすことのできない人には, 思いを文字(書記言語)によって伝えてきた。現代も同様であろう。

今回の授業では, 韋応物「秋夜寄丘員外」と李商隱「夜雨寄北」を学習する。前者は官を退き, 隱栖する友人に送ったもの, 後者は長安にいる妻に巴蜀の任地から宛てたものである。寄といっても込めた思いはそれぞれ異なる。詩人の境遇を述べつつ, 授業構想を記す。

韋応物(737?~804?)京兆長安の人。字は不詳。若くして任侠を好み, 玄宗の近衛兵となったが無頼の振る舞いがあったという。安史の乱以後, 行いを改め読書に励んだ。詩風は清遠にして閑雅の趣があり, 自然派詩人として, 王維, 孟浩然, 柳宗元と並んで「王孟韋柳」と称され, また陶淵明と併称して「陶韋」ともいう。『韋蘇州集』十巻が伝わる。

「秋夜寄丘員外」は官を退き臨平山に隱栖する丘丹に寄せた詩である。『唐詩記事』には「丹隱臨平山, 与韋蘇州往還。」(丹臨平山に隱れ, 韋蘇州と往還す)とある。前二句・後二句に分けてよむか否かについて, 異なった考え方がある。すなわち前二句を実, 後二句を虚とよむか, 「空山松子落」までを实景とよむかである。

授業では前二句の丘丹を懐う明解さをよみとったのち, 後二句をどのように読み解くか生徒に考えさせ, 交流させる。結論は出ないが, それぞれがどのようによんだかということが肝要だということが感じられればよい。終わりに丘丹が和した詩を紹介する。寄せられたら和することも知る。

積大典はこの詩を「語浅而意遠」(語浅くして意遠し)と評している。

李商隱(812~858)懷州河内の人。字は義山。開成二年(837)の進士。杜牧, 温庭筠と共に晩唐の唯美主義的傾向を持ち, 元好問が「詩家総べて西崑の好きを愛するも, 独だ人の鄭箋を作る無きを憾む」というようにその詩は難解であった。ただ, 妻に送ったこの詩は典故も無く平易率直である。党派の争いに巻き込まれて官僚としては不遇であった商隱は, このときも意にそぐわぬ任で巴蜀にあった。詩は妻からの問いかけで始まり, それに答える言葉が綴られている。「寄」とは思いを寄せることでもある。七絶でこのような細やかな愛情表現が可能であることを読み解いていくことも言葉のもつ価値の認識を深めるであろう。

題 目 「寄す」 思いを読み解く一漢詩をよむことから見えてくるもの一

本時の目標

1. 詩の構成や展開の仕方について理解を深めることができる。
2. 書き手の考えや、意図を捉えて内容を解釈するとともに、詩の構成や、表現の多様性を読み解くことができる。
3. 他者とよみの交流ができる。

本時の評価規準

1. 詩の構成や展開の仕方について理解を深めている。(知識・技能)
2. 書き手の考えや、意図を捉えて内容を解釈するとともに、詩の構成や、表現の多様性を読み解いている。(思考・判断・表現)
3. 他者とよみの交流をしようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)

本時の学習指導過程

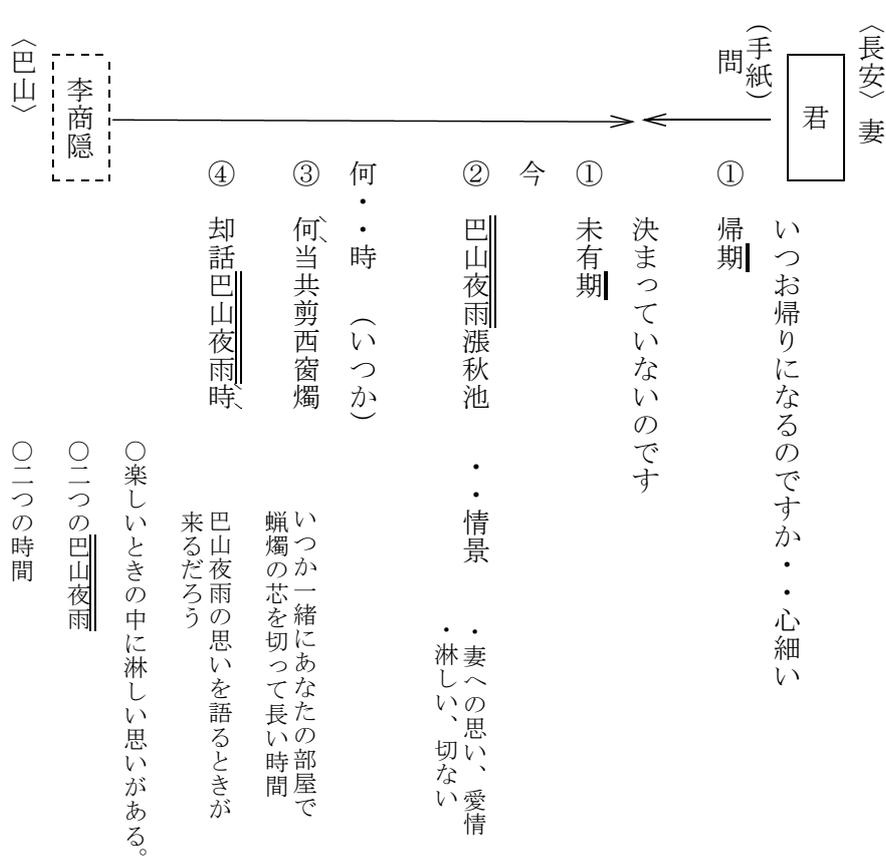
学習内容	指導上の留意点	評価の観点と方法
<p>〈導入〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の目標を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「寄」に込められた思いを考えていくことを告げる。 	
<p>〈展開〉</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 詩題を読む。 2 詩形・押韻を確認する。 3 詩を音読する。 4 君の問いを知る。 5 君に送った言葉を考える。 	<ol style="list-style-type: none"> 1 「寄」に着目させる。誰に送った詩か、捉えさせる。 2 七言絶句。 (「期・池・時」上平声支韻) 3 範読を聞かせ、語のまとまりを意識させる。 4 「君」は長安にいる妻。妻は何をたずねているか、捉えさせる。 5 「期」「巴山夜雨」を二度繰り返すところに着目させる。 作者の言葉を解釈させ、現代語で表現させる。グループで交流させ、発表させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 妻に送った詩であることが理解できる。 (発表・観察) ・ 近体詩の詩型・押韻が理解できる。 (発表・観察) ・ 漢詩のリズム、一句の構成が理解できる。 ・ 妻の問いから始まり、それに答える構成になっていることを読み解くことができる。(発表・観察) ・ 詩の技巧と心情を読み解くことができる。 ・ 協働して表現を練ることができる。 (発表・観察)
<p>〈まとめ〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 妻に送った言葉であることを捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遠く離れた妻に宛てた手紙代わりの詩であることを理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「寄」に込めた心情を理解する。

〈参考書〉 积大典、『唐詩解頤』、寛政 11 年。高橋和巳、『李商隠』、河出書房新社、1986 年。

夜雨寄北 晩唐 李商隱

君^ハ問^フ歸^ル期^ヲ未^ダ有^ラ期^ナ
 巴^ハ山^ノ夜^ノ雨^ノ漲^ル秋^ノ池^ニ
 何^カ當^ニ共^ニ剪^リ西^ノ窗^ノ燭^ヲ
 却^ツ話^カ巴^ノ山^ノ夜^ノ雨^ノ時^ヲ

- 1 北妻。
- 2 李商隱（八一二〜八五八）字は義山。晩唐の詩人。
- 3 期 きまつた時期。
- 4 未有期 帰る時期がきまらない。
- 5 巴山 ^{はざん} 山名。巴蜀（今の四川省）にある山。
- 6 何 「いつか」とよむ。疑問詞。
- 7 當（当）の旧字。「当にべし」（きつとくだらう）
- 8 剪燭 燭の芯の焦げた部分を切り取る。そうすると再び明るくなる。
- 9 西窗 ^{せいさう} 西向きの窓。女性の部屋を指す。
- 10 却 「かへツテ」とよむ。話の流れが変わることを表す助字。
- 11 話 語る。



- 語
- 1 寄・秋夜寄丘員外 中唐 韋応物
 - 2 七言絶句 押韻 期・池・時

実践上の留意点

1. 授業説明

今回は詩をよんだ。詩とは何かをうまく説明できないが、ある精神科医がギリシャ語の詩を翻訳したとき語っていた言葉が印象に残っている。「詩とは言語の兆候的側面を前面に出した使用であり、散文は言語の図式的側面が表になった用法である。」(中井久夫、『現代ギリシャ詩選』, 1985)

詩は言語である。その言語の兆候的側面という言い回しはさすが精神科医だなと感心した。何かが起こるかもしれないが、それは詩の言語によってしか表現できないものと自分なりに受け取っている。

さて、李商隱の「夜雨寄北」である。高校の教科書にある晩唐の詩は少ない。李商隱と並んで李・杜といわれた杜牧(「江南春」「山行」「清明」「泊秦淮」)あたりか。唐を初・盛・中・晩の四期に分類するが、これは明の高棟『唐詩品彙』に始まる。晩唐の李商隱などと言うが、当時生きていた人間には晩唐という言葉はない。勿論このままでは国が減じるなどという感覚はあったらうけれども。古典を読む者は、後世から眺めた地図をもって、その言語と向かう。

今回は「寄」に着目して、韋応物「秋夜寄丘員外」と李商隱「夜雨寄北」をよむ。詩をよむというのは、別の言語に置き換えてみることだと思う。訓読によって本来はよんだことになるのだろうが、現実はそのようではない。高校生が変換可能な言語は現代の散文である。

本時「夜雨寄北」について。一見難しそうに見えるが、長安にいる妻への思いを素直に表現している。授業では、まず詩題をよむ。「寄」は「離れている人に言葉をおくる」、北は妻のこと。離れたところにいる妻に思いをおくったことがわかる。妻は長安にいる。第一・二句はワンセットでよむ。第一句は、君(妻)が「帰期」(いつお帰りになるの)を問い、詩人が「未有期」(いつ帰れるともわからない)と答え、二句でいまいる巴山の情景を述べ、三・四句でさらに妻への思いを綴る。表現技巧として「期」「巴山夜雨」が二度繰り返されていることに気づかせ、その意味を問うた。発表では、第二句「巴山夜雨漲秋池」の解釈が、妻への愛情表現であると解釈したグループが四つもあったので驚いた。情景から心情を読み取るのは確かに難しいところもあるが、「秋池漲る」と訓じた語感を生徒は、「愛情が漲る」の隠喩のように解釈したのだった。手許の(現代日本語の)辞典を引いてみると、たしかに「漲る」の用例の頭に「愛情が」とあった。漢語では「漲」は「水の多く盛んなさま。みちあふれる。」意で、日本語のような用例はない。「巴山夜雨漲秋池」の「巴山」「夜雨」「秋」は妻から遠く離れたところで任に当たる詩人の、淋しい心情と密接に結びついた詩語として私の中にあった。それをしみじみと感じた時間だった。一方、難しいかなと案じていた三・四句を難なく解釈していった。詩語の表現する時間性をうまく捉え、物語に還元していったためであろう。

2. 研究協議

第二句の解釈と授業の在り方について、意見が出された。複数のグループが「詠者の妻に対する愛情がこめられている」と解釈したことについて、寒くなり、葉も落ちている秋の夜雨は、伝統的にものさびしさを表す景として用いられてきたが、生徒はそれを自分に引きつけて考えていた。伝統や構成(コード)に基づけば誤読と言うことになる。一方で、生徒なりに考えて読んだという点では、正しい読みと言うことになる。生徒は、想定外の読者であり、コンテキストは共有できず、コンテキストとテキスト双方が読者によって解釈され(作り上げられ)る。今回の授業では、それが第二句に顕在化したとも言えるのではないかと。

たしかに、第二句を漢詩の伝統的コードで解釈し、それを当然のこととして授業に臨んでいたことと生徒が日本語の言語用例で考えていたことに、生徒の発表で気がついた。漢詩は外国の古典詩である。外国語の解釈・翻訳を通して日本語の文体が持てるようになるのかもしれない。

高校における古典詩・散文の授業の在り方を追究していく必要性を感じた。

